

Book Review

ブックレビュー



『祈り—ヴァジャ・プシャヴェラ作品集』
著・ヴァジャ・プシャヴェラ
訳・児島康宏 絵・はらだたけひで

日本におけるジョージア(グルジア)文学・文化の第一人者である児島康宏氏が編んだジョージア文学を代表する作家・詩人のヴァジャ・プシャヴェラ(1861-1915)の作品集。すべてジョージア語からの直接訳である。キリスト教を信じるジョージアの人々は、イスラム教徒である異民族とつねに闘い、互いに復讐を繰り返している。そのなかで、敵と心を通わせてしまった人たちが「血の掟」との葛藤に直面する悲劇を格調高くたいあげた叙事詩「アルダ・ケテラウリ」「客と主人」、魔女が煮た蛇を一切れ食べたために生きとし生けるものと言葉を交わすことができるようになった男が人の世と相容れなくなるさまを描いた幻想的な叙事詩「蛇を食う者」、鳥、動物、植物を主人公にした短編、「狼の色」など動物を用いた比喩や独特のアニミズムの世界がとて魅力的だ。

2,200円(富山房インターナショナル)



沼野恭子さんの

『ロシアの歳時記』
編著・ロシア・フォークロアの会 なるうど

ロシア・フォークロアを研究している会「なるうど」のメンバーによるエッセイ集。「なるうど」は、共同でフィールドワークをしたり、毎月の例会で研究報告をしたりして、これまでもその成果を冊子にまとめてきたが、『ロシアの歳時記』は集大成と言っていい。タイトルどおり、ロシアのさまざまな風習、祭り、歌謡、諺、遊び、食べ物等が、四季の移ろいととも描写されていく。クリスマス・イヴに儀礼食として食べるクチャー(ひき割り麦と蜂蜜または米と干しドウで作る粥)、4月の聖母福音祭の日に行う鳥占い、追善供養の墓参りでうたわれる泣き歌、妖怪パンニクの棲む蒸風呂小屋……。ロシアならではの生活習慣が具体的によくわかる。各章の最後にチャイコフスキーのピアノ曲「四季」が3曲ずつ紹介されているのも歳時記としての本書にふさわしい。

2,300円(東洋書店新社)

ぬまの・きょうこ
ロシア文学者。東京外国語大学教授。著書に『ロシア文学の食卓』『夢のありか—「未来の後」のロシア文学』などがある。訳書に、リュドミラ・ウリツカヤ『子供時代』、ボリス・アクーニン『リヴァイアサン号殺人事件』、リュドミラ・ベトルシェフスカヤ『私のいた場所』など多数。

『ミセス』書評委員のかたがた

- 池内 紀さん(ドイツ文学者、エッセイスト)
- 斎藤美奈子さん(文芸評論家)
- 中島京子さん(小説家)
- 沼野恭子さん(ロシア文学者)
- 野中 柊さん(小説家)
- 蜂飼 耳さん(詩人、作家)
- 師岡カリーマ・エルサムニーさん(文筆家)



『世界イディッシュ短篇選』
編訳・西 成彦

イディッシュ語で書かれた短篇を集めた画期的な翻訳アンソロジーである。イディッシュ語とは、中高ドイツ語方言にスラブ語やヘブライ語などが混じってできた言語で、現在も世界中のユダヤ人によって話されている。

収録されているのは、毎朝姿を消す導師のあとをつけていき、導師が貧しい女に薪を届け火を起してやっているのを目撃するリアニア男の話(イツホク・レイブシュ・ベレツ)、ユダヤ人を虐殺した罪人と偶然同じ下宿に住むことになった男が復讐を企て作家に協力を依頼しに来る話(ドヴィド・ベルゲルソン)、ユダヤ移民の集まるニューヨークのカフェでときどき出会う魅力的な女の話(イツホク・パシェヴィス・ジンゲル)。編者によれば、「被害者」としてだけでなく「加害者」の可能性をも疑ってみる「倫理性」にイディッシュ文学の特徴があるという。

920円(岩波文庫)



『空港時光』
著・温又柔

空港は、日常と非日常の「境界」にある空間だ。目的地ではないもどかしさを感じるとともに、非日常への飛翔に気が高ぶる。そして、この境界領域には物語のためのエネルギーが渦巻いているらしい。

温又柔氏の新刊は、そんなエネルギーを丁寧に掬い取った作品集である。「出発」から「到着」までの計10編の物語が収められているが、一つ一つが独立していて、設定も視点もさまざま。台湾出身のガールフレンドに「ふつうの日本人」となじられてしまう青年。日本企業の駐在員の子で中国語が流暢だった幼馴染。アメリカ暮らしの長い台湾人の娘……。読みやすく表紙もお洒落だが、ただの軽やかな物語集ではない。最後に併録されたエッセイを読む頃にはきつと、言語について、日本と台湾の関係について、これまでとは少し違う角度から具体的に考えられるようになっていだろう。

1,500円(河出書房新社)

【編集部のおすすめ】



『憂鬱な10か月』
物語の語り手は、母親の胎内「わたし」。胎児の父の父親しよと母親に持ちかける母英国きってのストーリーテラマキューアンの最新作。イアン・マキューアン著、村1,800円(新潮社)



『セウ川の書店主』
悩める人々に本を「処方」書店主のジャン・ベルデュある日ジャンは20年前の宛古手紙を見つけて彼女プロヴァンスへ出かけるーニーナ・ゲオルゲ著、遠山2,100円(集英社)



『「ふつうのおんなの子」のちから』
子どもの本から学んだ若草物語の四姉妹、ハイソ赤毛のアン、虫めづる姫様様々な子どもの本から生命科学者、中村桂子が「ふつうのおんなの子」の生中村桂子著1,500円(集英社)



『神の島のうた』
奄美の小さな島、沖永良抜けのような海と空、牛と月桃の花……。現地の人愛する歌が静かに流れる中藤初枝著、葛西亜理1,850円(講談社)